古代中国における「無為」の政治思想研究―新出土資料の考察を中心に―

（要約）

広島大学大学院文学研究科

博士課程後期人文学専攻

学生番号：D165451

氏名：熊奕淞

一、論文の構成

序章

一、研究の背景

二、なぜ「無為」の政治思想を研究対象にするのか

三、研究の方法

四、各章の論点

第一章 上海博物館蔵戦国楚簡『凡物流形』考

はじめに

一、形而上学的な「一」

二、「一」の工夫と「無為」の思想

三、『凡物流形』の思想構造とその「無為」の思想の特徴

おわりに

第二章 上海博物館蔵戦国楚簡『恒先』考

はじめに

一、「復」と「自作為」、「自生」との関係について

二、「恒」と「或」の「相生」について

三、「気」と「天地」、「万物」の「自生」について

四、『恒先』の政治思想とその思想構造

おわりに

第三章 『管子』心術下篇・内業篇考

はじめに

一、心術下篇と内業篇の共通部分の思想について

二、心術下篇と内業篇の特有部分について

三、心術下篇と内業篇の「祖本」と『凡物流形』

おわりに

第四章 馬王堆漢墓帛書『黄帝四経』考

はじめに
一、「天道」と「法」との関係について
二、「無」の「道」の位置づけ及び二つの「道」の一体化について
三、二つの「道」を一体化する論理について
四、『黄帝四経』における道法思想の成立について
おわりに

第五章 郭店楚簡『老子』考
はじめに
一、郭店『老子』における「返」と「弱」の「道」について
二、郭店『老子』における「虚」、「無」の位置づけについて
三、郭店『老子』の主な主張の根拠としての「道」について
四、郭店『老子』における政治的な主張の相互の関係について
おわりに

終章
一、『凡物流形』と『恒先』の成立先後の問題について
二、「無」の「道」の思想の成立について
三、郭店『老子』から『黄帝四経』に至る「無為」の政治思想の展開

二、論文の背景と目的

中国の先秦時代の道家的な政治思想が如何なるものであり、それが如何なる過程を経て漢初に流行した道家的な政治思想である黄老思想を生み出していったのかは、これまで十分に解明されてこなかった。漢代以前の道家関係の著作の大半が散逸してしまっているという資料的制約からである。しかし、近年、中国では郭店楚簡『老子』、『太一生水』や上海博物館蔵戦国楚簡『恒先』、『凡物流形』など道家的な思想内容を持つ戦国期の新出土資料が陸続と現れてきている。これらの資料は先秦時代の道家的な政治思想について貴重な情報を与えてくれているが、これまでの研究の中心は各資料の文字学的な釈読にあり、それぞれの資料の思想内容の解明が十分に行われているとは言い難い。さらに、これらの新資料が与える新しい知見をふまえた伝世文献の再

検討や、新出土資料と伝世文献を組み合わせた新たな思想史の再構成については、いまだ本格的な研究がなされていない状態にある。

そこで、本論文では道家的な思想内容を持つ新出土資料において共通に見える「無為」の政治思想に着目して、早期の道家的な文献が語る「無為」の政治の形態及びその「無為」の政治思想の根拠としての「道」の思想を整理し、そこに思想史的な解析を加えることにより、「無為」の政治思想の展開という側面から早期の道家的な思想の形成と展開を解明することを目的とする。

三、各章の概要

本論文は序章、第一章「上海博物館蔵戦国楚簡『凡物流形』考」、第二章「上海博物館蔵戦国楚簡『恒先』考」、第三章「『管子』心術下篇・内業篇考」、第四章「馬王堆漢墓帛書『黄帝四経』考」、第五章「郭店楚簡『老子』考」及び終章からなる。

序章では論文の研究背景、研究対象及び研究の方法を説明した上で、各章の主な論点を指摘した。

第一章では楚簡『凡物流形』を検討した。本章では、『凡物流形』の上下部分をひとまとまりのものと見なす先行研究の見解を受け継ぎ、その下半部分で繰り返し語られる「一」の思想に注目して、そこに示された「一」の思想の多様性を示した上で、そこに示された「心一」の工夫と「静」的な「無為」の思想との関係を解明することで、『凡物流形』の思想構造を明確にした。その上で、その「無為」の思想が「無」の「道」によって展開される「無為」の思想を意識しながら構築されたものであることを示し、さらに、その「無為」の政治思想において為政者への説得力を増やすために「無」ではなく「一」が要請されるという点についても指摘した。

第二章では『凡物流形』に見える「一」と「復」の思想と関連する楚簡『恒先』を検討した。本章では、『恒先』に為政者の「無為」と百姓の「自生」という道家的な思想モデルが見られるという先行研究の見解を受け継ぎ、そこで展開される「自生」の宇宙生成論を解明するため、宇宙生成論と政治論の間に共通する「復」の語に注目して、その宇宙生成論を分析した。そして、この分析を通じて、『恒先』に見える、対立する概念の「相生」による「自生」という形式の生成論の構造を明らかにし、この生成論の上に立つ『恒先』の思想構造や「無為」の政治思想の特徴を解明した。さらに、『恒先』に見える「一」と「復」の思想と『凡物流形』の「復」の思想を比較するこ

とで、『恒先』に見える生成論に関する「復」の思想は『凡物流形』に見える循環往復による万物の永続に関する「復」の思想の発展した形であるとする結論を導いた。

第三章では「心」、「一」、「静」などの概念において『凡物流形』と共通性を持つ『管子』心術下篇・内業篇を検討した。『管子』心術下・内業篇は互いに重複が多いことで知られるが、その重複部分では「一」が、それ以外の部分では「道」が語られており、この両篇における「一」と「道」との排他的な分布は、ふたつの「道」の系統が交差していく過程を示している。そこで本章では、両篇の共通部分と、それ以外の部分の思想内容をそれぞれに分析し、両篇がいずれもある祖本を元にして増益して作られた文献であることを明らかにした。さらに、両篇の共通部分の思想構造と『凡物流形』との比較を通じて、両篇の祖本に見える「心」の思想が『凡物流形』に見える「心一」の工夫と「静」的な「無為」の思想の発展した形であることを示した。

第四章では「一」と「静」的な「無為」の思想の由来を明確にするために、黄老思想の代表的な文献である『黄帝四経』を検討した。『黄帝四経』に「天道」と「無」という二つの系統の「道」の思想が存在していることについては、すでに先行研究が指摘している。しかし、この二つの「道」の思想の『黄帝四経』の思想構造における位置づけ、特に「天道」と「法」との関係についてはいまだ十分に解明されていない。そこで、本章では「天道」と「無」の「道」について、それぞれの「法」との関係を明確にした上で、この二つの「道」の思想が『黄帝四経』において一体化されていることを示し、この一体化がなされる論理を明らかにするとともに、『黄帝四経』の道法思想の成立について検討を加えた。そして、以上の検討によって得られた知見に基づいて、「一」の政治思想と「静」で語られる「無為」の思想とは本来関係がないことを明確にした。

第五章では「道」と「無為」の思想の成立をさらに明確にするために、現存する最も古い『老子』テキストである郭店楚簡『老子』を検討した。今本『老子』五千言の約五分の二の分量しか含まれていない郭店『老子』については、それが今本『老子』の摘抄本であるのか、形成途中の『老子』テキストなのかについて意見が分かれている。本章では、先行研究が指摘する郭店『老子』の「道」と今本『老子』の「道」との相違の問題に注目し、郭店『老子』が語る「道」の具体的な内容を明らかにしてから、その「道」の思想と政治思想との関係を整理することによって、今本『老子』が郭店『老子』の基づくオリジナルな『老子』を核として、再編集されることによって

成立した文献であることを明らかにした。その上で、郭店『老子』から今本『老子』の「道」の思想に至る展開についても議論を加えた。

終章では、以上の検討で残されたいくつかの問題に解答を与えてから、早期の道家思想における「無為」の政治思想の展開について、一つの描像を与えた。

四、結論

本研究により明らかにされた先秦時期における「無為」の政治思想の展開はおおむね以下の通りである。

郭店『老子』の依拠したオリジナルの『老子』は「道」を根拠とする「無為」の政治思想の起点である。その「無為」の思想は、具体的には百姓に干渉しない政治を行うことで、逆に天下、百姓を得ることができるとするものである。そこで語られる「道」は、「返」すなわち対立するものが極点に至るとその反対側に転換するというものである。実践的な意味においては、「道」の「用」は、対立するものの「弱」の側、すなわちそのマイナス面に立つことで返って積極的な効果が得られるとするものである。郭店『老子』には今本『老子』における「無」の「道」による「無為」の思想はいまだ見えておらず、この「無」の「道」による「無為」の思想は郭店『老子』の後に新たに付け加えられたものである。

『凡物流形』は「無」の「道」による「無為」の思想が成立した後に、そこから「無」に関する要素を意識的に排除し、先行する「一」の思想を、『老子』などに見える「静」の思想と結びつけて成立した文献である。その「無為」の思想は、為政者が自分の身を疲れさせず、「静」の状態によって未来を予知し、天下のことをあまねく知り、その上で国を治めることによって永続的な治などの政治的な利益を得られるとするものである。「無為」の政治思想の展開において重要なのは、『凡物流形』がここに「一」の思想を結合させた点にある。

『恒先』は『凡物流形』に存在する万物の循環・往復に関する「同」、「復」の思想を、対立するものが「相生」することによって「自生」するとする生成論に発展させ、さらに、このような生成論を「無為」、「自然」の道家的な思考モデルに導入することによって、百姓の「自生」の可能性に根拠を提供し、「無為」の思想を強化している。『恒先』において「道」と対応するものは「同」の意味を持つ「一」、及び「一」による「復」であるが、「一」の部分には「虚無」の要素も含まれ、「無」の「道」と「一」

とを一体化した「道」の思想となっている。

『凡物流形』と同じく、『管子』心術下、内業篇の祖本にも「一」と「静」の思想が存在している。『凡物流形』と異なるのは、両篇の祖本には形而上学的な「一」の要素が残存しているものの、『凡物流形』のように形而上学的な「一」を政治的な効果を得られる直接の根拠とせず、「気」の思想を導入することで、内面的な工夫を外面的な「善気」や体の強壮などと結び付け、内面的な工夫を行うだけで天下を知り、国を治め、天下、百姓を得るなどの政治的な利益が得られると主張している。その思想の成立はほぼ『凡物流形』と同時期か或いはややそれに後れる時期であると考えられる。

『黄帝四経』は、先行する「天道」の思想と「無」の「道」の思想とを一体化して、「法」の制定及び運用における公正性、客観性を保つ法理論を提示している。そこで示される「無」の「道」と対応する「無為」の思想は為政者の「虚静」の状態とも関係するが、その強調する所は法の制定者及び運用者となる為政者の公正無私の状態であり、すでに『老子』などが主張する「無為」とはずれを生じてきている。ここに示されるような、万物、百姓のいずれにも「形名」があり、為政者はその「形名」を明らかにすることによって百姓を治め、国を治めるとする「無為」の思想は、他の新出土資料には見えないものであり、「無為」の政治思想の後期の形態を示している。